



Title	家庭の経済状況と児童・生徒の学習する理由の関連：課題価値に着目して
Author(s)	錦川, 拓海; Nishikikawa, Takumi; 大谷, 和大 他
Citation	子ども発達臨床研究, 19, 187-196
Issue Date	2024-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.19.187
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92004
Type	departmental bulletin paper
File Information	034-1882-1707-19.pdf



家庭の経済状況と児童・生徒の学習する理由の関連

— 課題価値に着目して —

錦 川 拓 海*・大 谷 和 大**

Reasons for learning in financially strained households: Association between household income and academic task values.

Takumi NISHIKIKAWA, Kazuhiro OHTANI

本研究では、家庭における経済状況と学習に関する変数（成績の自己認知、学習時間、学習する理由）との関連を検討した。学年ごとにクロス集計表を作成したところ、学習する理由については、高校2年生において所得階層の差が顕著であり、上位所得層は進学のためであり、下位所得層は仕事のためであった。成績の自己認知は所得階層が高いほど成績が良いと答える割合が高い傾向にあった。特に小学5年生・中学2年生で顕著であった。学習時間は学年が上がるにつれて、まったくしない割合が増える傾向であった。

キーワード：子どもの貧困、学業、課題価値、学習時間

問題と目的

家庭における経済状況は、子どもの発達に大きく関わることはもちろん、学習に関しても影響を与えており、所得階層と学業成績などが正の関連を示すことが明らかにされている（川口, 2019; Nonoyama-Tarumi, 2017; 末富, 2023）。このような家庭の経済状況が学力差を生み出す背景として、教育投資、特に学校外教育の機会の差が考えられる。学校外教育とは、学校外で行われる教育活動のことで、家庭における学習活動、塾等における学習活動、スポーツ活動などが含まれ（都村, 2015）、2022年の学研の調査では、習い事をしている子どもの割合は72.5%になっている（学研総

合教育研究所, 2022）。武内・中谷・松繁（2005）は、小・中学生の子どもがいる世帯は、所得が高い家計ほど子どもの教育に投資する傾向にあり時系列的にもその負担は増加傾向にあるとしており、所得の低い世帯の子どもほど、学校外教育を受ける機会は少ないと思われる。

2016年度に行われた「第1回子どもの生活実態調査」においても、経済状況が良い家庭の子どもほど成績が高くなっており（正確には、成績の認知が高い）、小学生と比べて中学生における差は顕著であった（大谷, 2022）。一方で、これまでの国内における調査研究では、経済状況と成績や学習時間などの分析がほとんどで、教育心理学で扱われている学習の意味づけなどの認知的要因

*北海道大学大学院教育学院研究生

**北海道大学大学院教育学研究院

(動機づけ要因)についてはほとんど扱われていない。例外として、2017年に旭川市で行われた「旭川市子どもの生活実態調査」では、知能観が扱われている。知能観とは、知能に対する個人の価値観であり、知能は柔軟に変化するものと捉える学習者ほど、学業成績が高くなることが示されている(Costa & Faria, 2018)。このように、個人が持つ認知的要因の違いが学習行動や学習結果の違いを生むのであれば、学習動機づけに関連する要因を調査する際には、認知的要因も合わせて検討することが必要であると考えられる。この調査では、知能観を目的変数とした重回帰分析を行ったところ、中学生においてのみ弱い関連が見られ、経済状況が良い家庭の子どもの知能観が高いことが示された(大谷, 2022)。

2021年の「北海道・札幌市子どもの生活実態調査」では、こうした学習における認知的な要因として、勉強する理由(例:面白いから)について児童・生徒に尋ねている。勉強する理由とは、言い換えれば、学習者が学習内容に対してどのような価値を見出しているのかということであり、この価値という概念は、古くから動機づけ研究で注目されてきた概念である(Atkinson, 1964; Eccles & Wigfield, 2002など)。Eccles & Wigfield (2002)のモデルでは、個人が持っている課題をやりたいという思いや学ぶ理由を課題価値と呼び、多面的な概念として定義づけしている。この理論では、課題価値を興味価値、獲得価値、利用価値、コストの4つの側面からとらえている。興味価値とは、課題に取り組むことの楽しさや面白さが得られる価値があることである。獲得価値とは、その課題に取り組んで成功すると、理想の自分が獲得できるという価値があることである。利用価値とは、学習者個人のキャリアや日常生活の中における有用性が得られるという価値があることである。利用価値はさらに、進学の実験に突破するための制度的利用価値、就職後の職業実践に役立つことを示す実践の利用価値などに細分化されることもある(伊田, 2004)。コストとは、課題の取り組む際に生じるネガティブな価値のこと

である。具体的には、失敗したら恥ずかしいといった「心理的コスト」や取り組むことで失う時間といった「機会コスト」、課題が成功するためにしなければいけない努力量やそれに伴う負担といった「努力コスト」が挙げられている。課題価値の研究は、これらの価値(特に実践的利用価値)に介入することで生徒の動機づけや履修行動を促進させることが有効であることを示している(Hulleman & Harackiewicz, 2009)。この研究は、米国での研究であるが、経済状況を斟酌した場合、特に経済的に困難な層ほどこうした介入の効果が示されている。学習における価値などの認知的要因を扱うことは、子どもの学習にとって重要であり、特に経済的にハンデのある子どもの学習を考えるうえで大きな意味をもつといえる。

そこで本研究は、2021年度に行われた「北海道・札幌市子どもの生活実態調査」のデータを用いて、2016年度の第1回調査と同様に経済状況を中心に、成績、勉強時間との関係を見つつ、新たな視点として課題価値との関係を検討することを目的とする。また、大谷(2022)では小学生、中学生の分析であったが、高校生については明らかにできていないため、今回は高校生のデータも合わせて検討する。

方 法

対象

対象は、2021年に実施された「北海道・札幌市子どもの生活実態調査」に回答した小学校5年生3,100名、中学校2年生2,786名、高校2年生2,275名、合計8,168名の回答である。所得階層の分類については、本調査で設定されている5階層に従う。詳しくは、序章を参照。

質問項目

課題価値 質問文は「あなたが学校の勉強に取り組む主な理由は以下のどれですか」とした。回答は、「面白いから」「中学校・高校受験のため」「大学受験のため」「将来の仕事に役立つかもしれないから」「先生や家族に言われるから」「その他の

理由（自由記述）」の6つの選択肢から当てはまるものをすべて選択してもらった。

各理由は、課題価値と一部対応しており、課題に対する好奇心を含んでいる「面白いから」は「興味価値」、目標となる進学先に合格するために取り組んでいる「中学校・高校受験のため」「大学受験のため」は「制度的利用価値」、自身の未来、キャリアのために取り組んでいる「将来の仕事に役立つかもしれないから」は「実践的利用価値」、「先生や家族に言われるから」は課題価値理論の価値の側面には該当しないが児童・生徒の学習する理由として尤もらしいため検討する。

成績の認知 質問文は「あなたの成績は、クラスの中でどのくらいだと思いますか（高校生は「現在の成績は学年の中でいうとどのくらい）」とした。「よいほう」「どちらかというといよいほう」「まんなかあたり」「どちらかというといくなくほう」「よくないほう」の選択肢から1つ回答を求めた。

学習時間 質問文は「あなたは、ふだん学校の授業以外に、1日あたりどれくらいの時間勉強しますか」とした。回答は、「まったくしない」「30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」「1時間以上、2時間より少ない」「2時間以上、3時間より少ない」「3時間以上」の選択肢から1つ回答を求めた。

分析 各質問項目について、所得階層とのクロス集計表を作成し、各所得階層において回答した合計の人数に対して割合をそれぞれ算出した。課題価値は複数回答可能なため、各所得層の子どもの人数に対して割合を算出した。なお、各質問項目における無回答ならびに所得階層の分類ができなかった回答は分析から除外した。クロス集計表の作成には、統計解析ソフト IBM SPSS Statistics version 24 (IBM) および Microsoft Excel® を使用した。

結 果

課題価値と所得階層のクロス集計を表1、学年ごとの表を表2～4に示す。学年全体では、約半数が「将来の仕事に役立つかもしれないから」と回答した。学年全体を所得階層別に見ると、「面白いから」と回答した子どもの割合は、所得が低くなるほど、小さくなる傾向にあった。また、「大学受験のため」と回答した子どもの割合は、「中間所得層Ⅱ」と「上位所得層」だけ30%を越えている一方、他の所得は20%前後であった。

学年別に見ると、「面白いから」と回答した子どもの割合が、小学5年生では、どの階層も20%以上であったが、中学2年生、高校2年生で

表1 課題価値と所得階層のクロス集計表（学年全体）

		N	あなたが学校の勉強に取り組む主な理由					
			面白いから	中学校・高校受験のため	大学受験のため	将来の仕事に役立つかもしれないから	先生や家族に言われるから	その他の理由
全体		7342	1405	2917	2034	3940	1838	615
		-	19.1%	39.7%	27.7%	53.7%	25.0%	8.4%
所得階層	低所得層Ⅰ	1210	199	406	255	622	333	114
		-	16.4%	33.6%	21.1%	51.4%	27.5%	9.4%
	低所得層Ⅱ	1272	231	524	251	710	289	117
		-	18.2%	41.2%	19.7%	55.8%	22.7%	9.2%
	中間所得層Ⅰ	1243	239	495	285	666	313	101
		-	19.2%	39.8%	22.9%	53.6%	25.2%	8.1%
所得階層	中間所得層Ⅱ	2091	407	872	669	1118	548	169
		-	19.5%	41.7%	32.0%	53.5%	26.2%	8.1%
	上位所得層	1526	329	620	574	824	355	114
		-	21.6%	40.6%	37.6%	54.0%	23.3%	7.5%

は15%を下回る所得階層が多くなった。また、中学2年生においては、「中学校・高校受験のため」と回答した割合が一番大きく、6-7割になっていた。加えて、高校2年生においては、「大学受験のため」の割合が一番大きくなったのが上位2所得階層で、「将来の仕事に役立つかもしれないから」の割合が一番大きくなったのが下位3所

得階層であった。また、「大学受験のため」を選んだ子どもは、小学校・中学校でも一定数おり、すでに大学を見据えて学習をしていることを示している。そして、小学校(上位で約20%、低Iで約13%)、中学(上位で約26%、低Iで約13%)共に家庭の経済状況による差がすでに顕著になりつつある。

表2 課題価値と所得階層のクロス集計表(小5)

		N	あなたが学校の勉強に取り組む主な理由						
			面白いから	中学校・高校受験のため	大学受験のため	将来の仕事に役立つかもしれないから	先生や家族に言われるから	その他の理由	無回答
全体		2821 －	853 30.2%	1065 37.8%	475 16.8%	1792 63.5%	602 21.3%	269 9.5%	106 3.8%
所得階層	低所得層Ⅰ	453 －	124 27.4%	153 33.8%	59 13.0%	274 60.5%	114 25.2%	36 7.9%	17 3.8%
	低所得層Ⅱ	512 －	154 30.1%	203 39.6%	70 13.7%	327 63.9%	96 18.8%	55 10.7%	14 2.7%
	中間所得層Ⅰ	516 －	160 31.0%	170 32.9%	78 15.1%	331 64.1%	109 21.1%	43 8.3%	17 3.3%
	中間所得層Ⅱ	781 －	233 29.8%	294 37.6%	153 19.6%	501 64.1%	171 21.9%	73 9.3%	30 3.8%
	上位所得層	559 －	182 32.6%	245 43.8%	115 20.6%	359 64.2%	112 20.0%	62 11.1%	28 5.0%

表3 課題価値と所得階層のクロス集計表(中2)

		N	あなたが学校の勉強に取り組む主な理由						
			面白いから	中学校・高校受験のため	大学受験のため	将来の仕事に役立つかもしれないから	先生や家族に言われるから	その他の理由	無回答
全体		2507 －	307 12.2%	1852 73.9%	494 19.7%	1276 50.9%	748 29.8%	173 6.9%	49 2.0%
所得階層	低所得層Ⅰ	393 －	32 8.1%	253 64.4%	53 13.5%	182 46.3%	132 33.6%	29 7.4%	9 2.3%
	低所得層Ⅱ	430 －	41 9.5%	321 74.7%	57 13.3%	215 50.0%	114 26.5%	27 6.3%	5 1.2%
	中間所得層Ⅰ	433 －	48 11.1%	325 75.1%	70 16.2%	192 44.3%	128 29.6%	38 8.8%	11 2.5%
	中間所得層Ⅱ	750 －	107 14.3%	578 77.1%	181 24.1%	402 53.6%	232 30.9%	50 6.7%	12 1.6%
	上位所得層	501 －	79 15.8%	375 74.9%	133 26.5%	285 56.9%	142 28.3%	29 5.8%	12 2.4%

表 4 課題価値と所得階層のクロス集計表（高2）

		N	あなたが学校の勉強に取り組む主な理由					
			面白いから	中学校・高校受験のため	大学受験のため	将来の仕事に役立つかもしれないから	先生や家族に言われるから	その他の理由
全体		2014 -	245 12.2%	0 0.0%	1065 52.9%	872 43.3%	488 24.2%	173 8.6%
所得階層	低所得層Ⅰ	364 -	43 11.8%	0 0.0%	143 39.3%	166 45.6%	87 23.9%	49 13.5%
	低所得層Ⅱ	330 -	36 10.9%	0 0.0%	124 37.6%	168 50.9%	79 23.9%	35 10.6%
	中間所得層Ⅰ	294 -	31 10.5%	0 0.0%	137 46.6%	143 48.6%	76 25.9%	20 6.8%
	中間所得層Ⅱ	560 -	67 12.0%	0 0.0%	335 59.8%	215 38.4%	145 25.9%	46 8.2%
	上位所得層	466 -	68 14.6%	0 0.0%	326 70.0%	180 38.6%	101 21.7%	23 4.9%

表 5 成績の認知と所得階層のクロス集計表（全体）

		N	クラス / 学年で成績の位置				
			よいほう	どちらかという とよいほう	まんなかあたり	どちらかという とよくないほう	よくないほう
全体		7253 -	1071 14.8%	1608 22.2%	2419 33.4%	1128 15.6%	1027 14.2%
所得階層	低所得層Ⅰ	1193 -	109 9.1%	209 17.5%	407 34.1%	230 19.3%	238 19.9%
	低所得層Ⅱ	1262 -	163 12.9%	233 18.5%	431 34.2%	233 18.5%	202 16.0%
	中間所得層Ⅰ	1226 -	164 13.4%	274 22.3%	427 34.8%	194 15.8%	167 13.6%
	中間所得層Ⅱ	2068 -	343 16.6%	495 23.9%	695 33.6%	288 13.9%	247 11.9%
	上位所得層	1504 -	292 19.4%	397 26.4%	459 30.5%	183 12.2%	173 11.5%

成績の認知と所得階層のクロス集計を表5、学年ごとの表を表6～8に示す。学年全体では、「まんなかあたり」と回答した子どもの割合が最も大きく、両極に行くにしたがって割合が小さくなっており、概ね正規分布の傾向を示していると考えられる。学年全体を所得階層別に見ると、「よいほう」「どちらかというようほう」と回答した子どもの割合が、低所得層では小さくなり、上位所得層では大きくなる傾向が見られた。

学年別に見ると、小学5年生・中学2年生では、

所得階層別で見た時と同様に、所得が高くなるにつれて、自分の成績を良く認知する傾向が見られたが、高校2年生ではこの傾向は見られなかった。小学5年生において、他の学年よりも「どちらかというとよくないほう」「よくないほう」の割合は小さく、「どちらかというとよいほう」「よいほう」の割合は大きくなっていった。中学2年生においても同様の傾向が見られたが、低所得層において、成績を「よくないほう」と認知している割合が大きくなっていった。

表6 成績の認知と所得階層のクロス集計表（小5）

		N	クラス / 学年で成績の位置				
			よいほう	どちらかという とよいほう	まんなかあたり	どちらかという とよくないほう	よくないほう
全体		2777 -	493 17.8%	672 24.2%	1073 38.6%	345 12.4%	194 7.0%
所得階層	低所得層Ⅰ	446 -	45 10.1%	85 19.1%	189 42.4%	76 17.0%	51 11.4%
	低所得層Ⅱ	508 -	78 15.4%	98 19.3%	212 41.7%	80 15.7%	40 7.9%
	中間所得層Ⅰ	508 -	79 15.6%	125 24.6%	211 41.5%	60 11.8%	33 6.5%
	中間所得層Ⅱ	766 -	154 20.1%	203 26.5%	281 36.7%	82 10.7%	46 6.0%
	上位所得層	549 -	137 25.0%	161 29.3%	180 32.8%	47 8.6%	24 4.4%

表7 成績の認知と所得階層のクロス集計表（中2）

		N	クラス / 学年で成績の位置				
			よいほう	どちらかという とよいほう	まんなかあたり	どちらかという とよくないほう	よくないほう
全体		2481 -	305 12.3%	477 19.2%	756 30.5%	413 16.6%	530 21.4%
所得階層	低所得層Ⅰ	388 -	24 6.2%	42 10.8%	110 28.4%	84 21.6%	128 33.0%
	低所得層Ⅱ	427 -	38 8.9%	59 13.8%	127 29.7%	94 22.0%	109 25.5%
	中間所得層Ⅰ	427 -	48 11.2%	79 18.5%	132 30.9%	75 17.6%	93 21.8%
	中間所得層Ⅱ	744 -	107 14.4%	166 22.3%	245 32.9%	98 13.2%	128 17.2%
	上位所得層	495 -	88 17.8%	131 26.5%	142 28.7%	62 12.5%	72 14.5%

表8 成績の認知と所得階層のクロス集計表（高2）

		N	クラス / 学年で成績の位置				
			よいほう	どちらかという とよいほう	まんなかあたり	どちらかという とよくないほう	よくないほう
全体		1995 -	273 13.7%	459 23.0%	590 29.6%	370 18.5%	303 15.2%
所得階層	低所得層Ⅰ	359 -	40 11.1%	82 22.8%	108 30.1%	70 19.5%	59 16.4%
	低所得層Ⅱ	327 -	47 14.4%	76 23.2%	92 28.1%	59 18.0%	53 16.2%
	中間所得層Ⅰ	291 -	37 12.7%	70 24.1%	84 28.9%	59 20.3%	41 14.1%
	中間所得層Ⅱ	558 -	82 14.7%	126 22.6%	169 30.3%	108 19.4%	73 13.1%
	上位所得層	460 -	67 14.6%	105 22.8%	137 29.8%	74 16.1%	77 16.7%

表 9 学校外の学習時間と所得階層のクロス集計表（全体）

		N	学校がある日（月～金曜日）の学校以外の勉強時間					
			まったく しない	30分より 少ない	30分以上, 1時間より 少ない	1時間以上, 2時間より 少ない	2時間以上, 3時間より 少ない	3時間以上
全体		7226 -	740 10.2%	1308 18.1%	2148 29.7%	2026 28.0%	734 10.2%	270 3.7%
所得階層	低所得層Ⅰ	1182 -	178 15.1%	271 22.9%	316 26.7%	286 24.2%	101 8.5%	30 2.5%
	低所得層Ⅱ	1259 -	165 13.1%	265 21.0%	401 31.9%	307 24.4%	80 6.4%	41 3.3%
	中間所得層Ⅰ	1224 -	121 9.9%	227 18.5%	410 33.5%	314 25.7%	110 9.0%	42 3.4%
	中間所得層Ⅱ	2058 -	173 8.4%	354 17.2%	603 29.3%	628 30.5%	217 10.5%	83 4.0%
	上位所得層	1503 -	103 6.9%	191 12.7%	418 27.8%	491 32.7%	226 15.0%	74 4.9%

学習時間と所得階層のクロス集計を表9に、学年ごとの表を表10～12に示す。学年全体では、「30分以上、1時間より少ない」の割合が一番大きかった。学年全体を所得階層別に見ると、下位3所得階層は、「30分から1時間より少ない」と回答した子どもの割合が一番大きく、上位2所得階層は、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した子どもの割合が一番大きかった。また、「まったくしない」「30分より少ない」と回答した子どもの割合は、所得が低いほど大きくなる一方、「1

時間以上、2時間より少ない」「3時間以上」と回答した子どもの割合は、所得が低いほど小さくなっていた。学年別に見ると、中学2年生、高校2年生では、「まったくしない」と回答した子どもの割合が、所得が低くなるほど大きくなっており、割合も10%を越える所得階層が多い一方、小学5年生ではその傾向が見られず、「まったくしない」「2時間以上、3時間より少ない」の割合が全体と比べて5%以下と小さくなっていた。

表 10 学校外の学習時間と所得階層のクロス集計表（小5）

		N	学校がある日（月～金曜日）の学校以外の勉強時間					
			まったく しない	30分より 少ない	30分以上, 1時間より 少ない	1時間以上, 2時間より 少ない	2時間以上, 3時間より 少ない	3時間以上
全体		2758 -	77 2.8%	543 19.7%	1089 39.5%	769 27.9%	174 6.3%	106 3.8%
所得階層	低所得層Ⅰ	441 -	22 5.0%	114 25.9%	153 34.7%	110 24.9%	26 5.9%	16 3.6%
	低所得層Ⅱ	505 -	22 4.4%	112 22.2%	223 44.2%	110 21.8%	23 4.6%	15 3.0%
	中間所得層Ⅰ	504 -	11 2.2%	106 21.0%	219 43.5%	129 25.6%	24 4.8%	15 3.0%
	中間所得層Ⅱ	761 -	13 1.7%	133 17.5%	297 39.0%	242 31.8%	49 6.4%	27 3.5%
	上位所得層	547 -	9 1.6%	78 14.3%	197 36.0%	178 32.5%	52 9.5%	33 6.0%

表11 学校外の学習時間と所得階層のクロス集計表(中2)

		N	学校がある日(月～金曜日)の学校以外の勉強時間					
			まったく しない	30分より 少ない	30分以上, 1時間より 少ない	1時間以上, 2時間より 少ない	2時間以上, 3時間より 少ない	3時間以上
全体		2486 -	242 9.7%	387 15.6%	576 23.2%	813 32.7%	376 15.1%	92 3.7%
所得階層	低所得層Ⅰ	387 -	50 12.9%	77 19.9%	82 21.2%	115 29.7%	57 14.7%	6 1.6%
	低所得層Ⅱ	428 -	53 12.4%	77 18.0%	98 22.9%	142 33.2%	41 9.6%	17 4.0%
	中間所得層Ⅰ	430 -	44 10.2%	64 14.9%	116 27.0%	130 30.2%	55 12.8%	21 4.9%
	中間所得層Ⅱ	745 -	57 7.7%	121 16.2%	165 22.1%	248 33.3%	121 16.2%	33 4.4%
	上位所得層	496 -	38 7.7%	48 9.7%	115 23.2%	178 35.9%	102 20.6%	15 3.0%

表12 学校外の学習時間と所得階層のクロス集計表(高2)

		N	学校がある日(月～金曜日)の学校以外の勉強時間					
			まったく しない	30分より 少ない	30分以上, 1時間より 少ない	1時間以上, 2時間より 少ない	2時間以上, 3時間より 少ない	3時間以上
全体		1982 -	421 21.2%	378 19.1%	483 24.4%	444 22.4%	184 9.3%	72 3.6%
所得階層	低所得層Ⅰ	354 -	106 29.9%	80 22.6%	81 22.9%	61 17.2%	18 5.1%	8 2.3%
	低所得層Ⅱ	326 -	90 27.6%	76 23.3%	80 24.5%	55 16.9%	16 4.9%	9 2.8%
	中間所得層Ⅰ	290 -	66 22.8%	57 19.7%	75 25.9%	55 19.0%	31 10.7%	6 2.1%
	中間所得層Ⅱ	552 -	103 18.7%	100 18.1%	141 25.5%	138 25.0%	47 8.5%	23 4.2%
	上位所得層	460 -	56 12.2%	65 14.1%	106 23.0%	135 29.3%	72 15.7%	26 5.7%

考 察

本研究は、2021年度に行われた「北海道・札幌市子どもの生活実態調査」の小学生から高校生までのデータを用いて、2016年度の第1回調査と同様に経済状況を中心に、成績、勉強時間との関係を見つ、新たな視点として課題価値との関係を検討することを目的とした。

課題価値と所得階層のクロス集計表の分析からは、小学生では「面白いから」という興味価値を持って学習に取り組んでいる子どもの割合が大きく、中学生では「高校受験のためを」という獲得

価値を持って取り組んでいる子どもの割合が大きくなっていた。2022年の中学生の98.8%が高校進学をしており(国立社会保障・人口問題研究所、2022)、多くの中学生が高校受験を経験することになる。そのため、学習は、純粋な課題への興味によるものというより、受験に合格するという目的を達成するための手段になっていると思われる。

一方で、高校生では、「大学受験のため」の割合が一番大きくなったのが上位2所得階層で、「将来の仕事に役立つかもしれないから」の割合が一番大きくなったのが下位3所得階層であった。教

育費用の現状として、公立高校だと105万円、国公立大学だと481万円であり（日本政策金融公庫，2021）、高校から大学に進学することで必要教育費が約4.6倍になり、家計における負担は大きくなることから、所得が低い場合、進路選択において進学を選択肢を外して考えることが予想される。そのため、低所得層では、学習を進学のためではなく、就職のためや働いてから役立たせようとさせることが考えられる。「大学受験のため」を選んだ者は、小学生、中学生段階でも一定数おり、これには家庭の経済状況における差がすでに顕著になりつつあった。

一般的に、教員（特に中学、高校）は受験を意識しながら教育活動を行うことが多いと考えられる。このことが、「楽しいから」という理由づけが中学以降低下する要因の一つとなっていると推察される。そして進学は家庭の経済状況に大きく左右されるので、受験を過度に強調した授業づくりでは、経済的に厳しい家庭の子供ほど学ぶ意味を見出しにくく置き去りにされるの可能性が考えられる。一方、今回の調査では、どの層にも「将来の職業に役立つかもしれない」という理由には所得階層の差がなかった。これらのことから、生徒の実生活と学習内容を結びつけた利用価値を強調するような授業を行うことも大きな意味を持つと考えられる。例えば、道内各地域の産業などをテーマとして各教科に取り入れるなど、現在学習している内容が自身の生活や将来つくであろう職業と結びついていることを授業や教材を通じて伝える工夫が可能だろう。

成績の認知と所得階層のクロス分析からは、学年全体を所得階層別に見ると、小学5年生・中学2年生においては、所得が高くなるにつれて、自分の成績を良く認知する傾向が見られた。これは2016年度の第1回調査と同様の傾向である。一方で、高校2年生では所得が高くなるにつれて、自分の成績を良く認知する傾向は見られなかった。小・中学校は、通学地域によって学校が指定される一方、高校は試験によって同程度の学力をもった子どもが選抜されるため、成績を良く感じ

るのは難しいと思われる。また、中学2年生では、低所得層において成績を「よくないほう」と認知している割合が大きくなる傾向が見られた。これは、小学校から中学校に上がるに伴って、学習内容が難しくなり、特に教育的な投資などが受けにくい低所得層の生徒の成績が落ちている可能性が考えられる。また、成績の認知は、自己肯定感との関連が示されている（ベネッセ教育総合研究所，2017）ことから、認知が低いと自己肯定感も下がるなど心理社会的な側面に派生した影響を及ぼす可能性がある。特に所得階層の低い生徒の学習のケアを意識する必要があるだろう。

学習時間と所得階層のクロス分析からは、所得階層別に見ると、下位3所得階層は、「30分から1時間より少ない」と回答した子どもの割合が一番大きく、上位2所得階層は、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した子どもの割合が一番大きかった。また、「まったくしない」「30分より少ない」と回答した子どもの割合は、所得が低いほど大きくなる一方、「1時間以上、2時間より少ない」「3時間以上」と回答した子どもの割合は、所得が低いほど小さくなっていった。学年別に見ると、中学2年生、高校2年生では、「まったくしない」と回答した子どもの割合が、所得が低くなるほど大きくなっており、割合も10%を越える所得階層が多いが、小学5年生ではその傾向が見られず、5%以下であった。中学生の学校と部活の時間を合わせると約9時間（胡中，2017）、通学時間の往復の平均は51分（NHK，2021）、つまり片道は25.5分として計算すると、毎日約18:00に帰宅していることになる。平均就寝時間は、22:38とされている（学研総合教育研究所，2023）ことから、自宅で過ごす時間は約5時間となる。高校生では、通学時間、下校時間が更に伸び、自宅で過ごす時間は減ることが予想される。また、貧困世帯の保護者は就業時間が長い場合、家事をする時間が少なくなることが予想され、子どもが家事をこなす割合が増えると思われる。この中で、学習の時間を長時間確保することは難しいため、中学生以降の家庭での学習時間が

減と考えられる。そのため、ICTを活用したり、通学時間にできる勉強方法や教材を教えたりする必要があると思われる。

本研究の限界と今後の展望

本研究では特に児童・生徒の学習する理由について課題価値の側面から検討した。これは国内における社会調査ではあまり扱われていない要因であり、一定の社会的及び学術的な意義を持つと考えられる。一方で、今回の分析では、学習する理由(価値)それぞれについて考えたが、個人において価値は一つではなく、その組み合わせパターンも複数存在すると考えられる。今後はこうした価値の組み合わせと経済状況の関連について検討していくことが望まれる。

また、本研究では横断的に小学生、中学生、高校生といった学年段階について検討したが、経済状況が子どもの学習する理由にどのように影響を及ぼすのか発達の軌跡について検討する必要がある。これを実現するためにはパネルデータによる縦断研究が望まれる。縦断研究は大きなコストがかかるものの、それを補って余りあるメリットが得られるため、こうした社会調査においてもパネル調査が実施されることを願うばかりである。

引用文献

- Atkinson, J.W. (1964). *An Introduction to Motivation*. Princeton, NJ: Van Nostrand.
- ベネッセ教育総合研究所 (2017). 子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2017 ベネッセ教育総合研究所 Retrieved 2024/01/04 from https://berd.benesse.jp/up_images/research/All_oyako_tyosa_2015_2017_w-eb.pdf
- Costa, A., and Faria, L. (2018). Implicit theories of intelligence and academic achievement: A meta-analytic review. *Frontiers in Psychology*, 9, 829.
- Eccles, J.S., & Wigfield, A. (2002). Motivational beliefs, values, and goals. *Annual Review of Psychology*, 53, 109-132.
- Hulleman, C.S., & Harackiewicz, J.M. (2009). Promoting interest and performance in high school science classes. *Science*, 326, 1410-1412.
- 学研総合教育研究所 (2022). 小学生白書 Web 版「小学

- 生の日常生活・学習に関する調査」7. 習い事について学研総合教育研究所 Retrieved 2023/12/17 from <https://www.gakken.jp/kyouikusuouken/whitepaper/20220-9/index.html>
- 学研総合教育研究所 (2023). 小学生白書 Web 版「小学生の日常生活・学習に関する調査」4. 日常生活について学研総合教育研究所 Retrieved 2023/12/27 from <https://www.gakken.jp/k-youikusuouken/whitepaper/20-2310/chapter4/02.html>
- 伊田勝憲 (2004). 高校生版・課題価値測定尺度の妥当性検討—自意識および達成動機との関連から— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 177-125.
- 川口俊明 (2019). 日本の学力研究の動向 福岡教育大学紀要, 68(4), 1-11.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2022). 人口統計資料集 (2023) 改訂版 表 12-60 都道府県別中学校・高等学校卒業者の進学率および就職率: 2022 年 国立社会保障・人口問題研究所 Retrieved 2023/12/26 from https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2023-RE.asp?fname=T12-60.htm
- 胡中孟德 (2017). 中学生の生活時間と社会階層 教育社会学研究, 100, 245-264.
- Nonoyama-Tarumi, Y. (2017). Educational Achievement of Children From Single-Mother and Single-Father Families: The Case of Japan: Children of Single-Parent Families in Japan. *Journal of Marriage and Family*, 79(4), 915-931.
- NHK 放送文化研究所世論 (2021). 国民生活時間調査 Retrieved 2023/12/26 from <https://www-nhk.or.jp/bunken/yonon-jikan/>
- 日本政策金融公庫 (2021). 教育費負担の実態調査結果
- 大谷 和大 (2022). 学校での学びと経済状況 松本伊智朗 (編) 子どもと家族の貧困—学際的調査からみえてきたこと (pp. 189-202) 法律文化社
- 末富 芳 (2023). 学力・学習状況への貧困・ひとり親の影響 国立大学法人福岡教育大学 保護者に対する調査の結果を活用した家庭の社会経済的背景 (SES) と学力との関係に関する調査研究 (pp. 56-66).
- 武内真美子・中谷未里・松繁寿和 (2005). 学校週5日制導入に伴う補習教育費の変化 家計経済研究, 69, 38-47.
- 都村聞人 (2015). 学校外教育の活動タイプと支出格差 現代社会研究, 1, 115-129.